

平家物語と緒方惟栄

— 平家の大宰府落を中心にして —

会員 佐 助 貴 一

(福岡市東区城浜団地ハカニ)

かつて佐伯莊とよばれた現在の佐伯市を故郷とし、本莊榊牟礼城麓を祖先墳墓の地とする私たちがとって、大神、緒方、佐伯の各姓は、もともと縁故の深い、なつかしい氏姓であるといつてよい。

それは中世といわれる時代には、豊後國の新興勢力であった大神氏の族長として、豊後武士の頭領となつた緒方惟栄を持ち、その惟栄を始祖とする佐伯氏が、佐伯莊の開発領主であるからである。

緒方惟栄は源平争鬪の時代に、分つてはその主家であつた子家に救いた。それは、木曾義仲に追われて都落ちし、大宰府に拠ろうとした子家を、惟栄は源氏に加担して兵をあげ、九州から追出した。

惟栄にからまる郷土の歴史は、平家滅亡の追捕に協力した史蹟と、宇佐宮焼亡の難で流罪になり、のち赦されて豊後に帰り、佐伯莊に隠退したという伝承だけである。佐伯氏は惟栄の譲りきうけて佐伯莊の地頭になつたものと思われるが、初代惟康(惟庸)から四代惟久までは事蹟不明、豊後國田原に記載されている佐伯弥四郎政直(五代惟直)にいたつて、はじめに地頭御家人として、佐伯本莊百二十町を領知している。

しかし、佐伯入江とつては、緒方惟栄は郷土に血縁の

ある人傑であり、いま佐伯、緒方、大神、あるいは高畑、芦刈、宮脇、長田などの姓を名乗る人々は、いづれも大神姓を称して惟栄を中興の祖先にしてゐる。

そして惟栄という人物のイメージを描いて、粗野で豪放な武將としてゐるが、一面、特流に乗りこなつた傑物という感じを捨てきれず、終焉地のはつきりしないその生涯が、一抹の悲哀を感じさせてゐる。

このほど、私は平家物語を読んで、平家と緒方惟栄の關係について考えさせられた。平家物語巻八「緒環」の章は、緒方惟栄の出現について記述したものが、それは大神太夫すなわち大神惟基の出生にからまる神傳伝説で、豊後國城岳のおそろい蛇神の子である惟基の、五代の孫である惟栄は、祖先に劣らぬおそろい武士であるとのべ、國司の命令を院宣といつあつて、九州中の兵をかりあつめ、大宰府におつた子家を攻めたて、ついに九州から追払つてしまつたと記してある。

これは大和の大三輪伝説の焼き直しで、豊後大神氏が、大野、大分、直入、海部各郡の開発領主としての地位を確保するたか、自尊自強したいおゆる「氏始め」の伝説である。

さて平家物語巻八の「那都羅」、「宇佐御幸」、「太宰府落」の各章には、平家と大宰府、平家と緒方惟栄に關する記述が多いが、この平家物語に表現された緒方惟栄が、そつくりそのまま、大友興發記などの、江戸時代に編述された郷土軍記類に登場し、私たちの惟栄史観になつてゐることを知つた。

(注) 大宰府について古文書、官庁名、職名、古地名として「大宰府」と書き(大宰權帥など)、現在の地名、天守官社等は「太宰府」と書く。

期くる十七日(注寿永二年八月十七日)平家は筑前国三笠郡太宰府にこそ著き給へ。菊池次郎高尚は、都より平家の御供に候ひけるが、大津山の鬨あけて参らせんとて肥後国に打越え、己が城に引籠つて、召せども召せども参らず。その外九州二島の者ども、皆参るべき由の御領状をば申しながら一人も参らず。当時は岩戸諸郷大蔵種直ばかり不候ひける。

〔平家物語卷八・那都羅〕
これは寿永二年(二八三)八月十七日、平家が安徳幼帝を奉じて、大宰府に落ちてきたことを記したもので、菊池隆重(次郎・吾妻鏡では北郎)と原田種重(大蔵氏は水姓)が京都から供奉警固してきた。しかし、菊池隆直は大宰府に着くと、筑後と肥後の境にある大津山の鬨を闘けてくるといつて、肥後国に入り、自領菊池郡に引上げ、いくら搦んでも大宰府へは出てこなかった。そのほか九州中の武士たちも、誰一人召状に答えて参集する者がなないので、しばらくは原田種直ばかりが随従していた。ここには書かれてないが、菊池隆直の立場は微妙なものであったようだ。吾妻鏡卷二・治承五年(二八二)二月二十九日の条に、

鎮西に於て兵革有り、是肥後国住人菊池九郎隆直、豊後国住人緒方三郎惟能ら平家に反くの故なり。隆直は同輩の輩は木原次郎盛実法印・南郷大宮司惟安(河蘇)、惟能に相具する者は大野六郎家基・高田次郎隆澄等なり。(中略)平家の方人原田大夫種直、九州の軍士二千騎を相催して合戦を遂ぐ。隆直らの御供多く以て疵を被る。

とあって、治承五年(養和元年)二月、以仁王の令旨による源氏拳兵に依じて、平家膺懲の旗を挙げた菊池隆直、これに一味した緒方惟能は、それまでほととに平家に従

属して「御家人」とを称していた地方豪族であったが、このとき筑前に進攻して平家と堂の原田種直と戦い、二月十五日大宰府に入り、これを焼亡した。

菊池・緒方の反乱を聞いた平家は、肥後守平貞能に兵三千余騎を付けて、鎮西に突向させ、大宰府を復し、肥後に入りて菊池城に隆直を囲んだ。攻囲六か月、ついに隆直を屈服させた。これは養和二年(二八三)のことで、以来隆直は忠実な平家御家人として京都におられたらしい。ところが隆直と行動をとらした惟能は、この間どうしていたのであろうか。竹田市の岡城などは緒方惟能が創業したという伝説のあることを考えると、豊後南部は惟能の勢力が強く、さすがの平の貞能も、攻伐することができなかつたのではなからうか。

ともあれ、壽永二年七月二十五日、京都を追い落された平家は、原田種重の先導で、いまは平家の味方となつた菊池隆直らと共に、筑前国三笠郡(御笠郡)大宰府に着いたが、府中及びすぐそばの治承五年の兵火で焼失していたので、ひとまが安楽寺(大宰府天満宮)に入ったが、やがて大宰少貳(権大宰少貳が正しい)原田種直の出る城館に移った。

平家は筑紫に都を定め、内裏造らるべしと、公卿會議ありしかども、都も未だ定まらず。主上はその頃、岩戸諸郷大蔵種直が宿所をぞましましける。人々の家は野中田中有りければ、麻の衣はうたねども、十市の里とも謂いつべし。内裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやありけん、なかなか優れる方もありけり。

〔平家物語卷八・宇佐御幸〕
これは安徳天皇が、原田種直の居館を御座所になさったことを述べたもの。この当時原田氏は原田荘(現在の

系為郡といふ)を中心、早良、那珂郡の一部、御笠郡(大宰府)付近の勢力を張り、所領三千七百町歩、その勳員兵力は二千余騎といわれた。山岩戸諸郷は正しくは岩戸小郷、岩戸は原田種直の居館のあった岩戸村へ現在の筑紫郡那珂川町岩戸(安徳地区)、少郷は大宰少貳の唐名である。大蔵種直と記されているのは、原田氏が大蔵氏の嫡流であったからである。また原田氏の一族で、種直の従弟にあたる板井共衛種直は、父種久の代から豊前国に上着し、京都郡神楽城を本拠に、京都・筑上・仲津・田川各郡に所領をもち、種直の娘は宇佐大官司公通の子公房に嫁し、板井・宇佐両氏は提携して、豊前国における有力な平家と党となった。

さる十月七日、私は筑紫那珂川町を訪れた。現人橋(あらはとばし)でバスを降りた私は、居合せた老媪は、安徳地区への道を聞いた。現人橋を渡ると、県道の右側が安徳地区、左側が岩戸地区である。安徳の部落の中ほどに現人神社がある。現人神(あらひとがみ)とは天皇を指すことば、安徳幼帝ゆかりの神祠ではなからうか。聞く人もないままに、私は部落の中の道を南下して、丘陵の麓についた。この山は城山といわれ、この一帯を安徳台という。そこで神祠のことを聞いたが、はっきりしたことはあからなかった。

伝承によると、安徳天皇が原田の居館におられたのは十日ばかりで、八月二十八日には、大宰府(坂本の善正寺(筑紫野市武蔵寺の支坊)に設けられた行在所)に移ったという。

さる程に、平家は筑紫に都を定め、内裏造らるべしと、公卿會議ありしかども、惟義(緒方惟義)が謀叛に依って、それも叶はず、新中納言知盛卿の意見に申

されけるは「かの緒方三郎は小松殿(平重盛)の御家人なり。然れば君違御一所向はせ給ひてこしらへて御覽せらるべうもゆ候らん」と申されければ、「この儀最も然るべし」として、新三位中将資盛その勢五百余騎豊後国に打越え、様々にこしらへ宣へども、惟義隨ひ奉らず。判へ「君違をも、これにて取り籠め参らすべう候へども、大事の中の小事なして、取り籠め参らせずば、何程の事が候べき。只大宰府へ帰らせ給ひて、御一所で如何にもならせ給へ」と追つ返し奉る。

その後惟義の次男、野尻次郎惟村を使者にて、大宰府へ申しけるは、「平家こそ重恩の君にてましまし候へば、甲を脱ぎ弓の弦を弛いて、降人に参るべく候へども、一院の仰せにば、速かに九国の内を追い出し奉るべき由候。」と申し送つたりければ、平大納言時忠卿(略)惟村に出で向ひて宣ひけるは「それわが君へ安徳天皇は天孫四十九世の正統、神武天皇より八十八一代に当らせ給ふ。されば天照大神・正八幡宮も、わが君をこそ守り参らせ給ふらめ。就中平家は、保元平治より以来、度々の逆乱を鎮めて、九州の者どもをば、皆内様へこそ召されしか。然るにその恩を忘れて、東国・北国の凶徒等、頼朝・義仲等に誣らばれて、しおほせたらば國を預けん、庄を賜はんと申すき、実と思ひて、その鼻豊後が下知に随ふらん事こそ然るべからぬ」とぞ宣ひける。豊後国司刑部卿三位頼輔卿は、極めて鼻の大きなりければ、かゆうには宣ひけるなれ。惟村帰って父にこの由告げたりければ、「こは如何に、昔は昔、今は今、その儀ならば、九国の内を追い出し奉れぬ」として、勢揃ゆると聞えしかば、源大夫判官季貞、攝津判官盛澄「向後傍輩のため奇怪に候。召捕り候はん。」とて、その勢三千余騎で、筑後国に打越え、

高野の本莊に宛向して、一日一夜攻め滅ぶ。されども惟義が方の勢、雲霞の如くに重まれ、力及ばず引退す。

（平家物語卷八、大宰府落）

壽永二年七月、平家は安徳天皇を奉じて、大宰府に落ちてきたので、はじめに緒方惟栄が積極的に行動に移るようになつた。

そのころ豊後国は刑部卿藤原頼朝（頼資）の知行國で、孫の宗長が國守、つまり豊後守に任ぜられていた。そして平家物語によると、頼朝から頼経に、平家を九州から追ひ出すよう緒方惟栄に命ぜよ、と示達されたので、頼経はこれを院宣と称して惟栄に伝達した。

一方平家は、惟栄がもと平重盛の家人であつたので、重盛の子資盛に兵五百騎をつけて豊後に遣わし、いろいろと説得したが、惟栄は院宣を楯に平家の申入れをきかず、逆に大宰府からの退去を求めた。そのすえ、次男の野尻惟村を使者として大宰府におくり、さらに強く大宰府からの退去を迫つたので、さすがに平家もこれを拒絶し、源大夫判官季貞、根津判官盛澄の二人に、三千余騎をさすけて筑後國に向わせ、高野の本莊にあつた惟栄方と対陣、一日一夜攻め滅つたが、惟栄方は三万余の大軍であつたため、平家方は力及ばず引退した。

とこゝで、平家方の三千余騎が攻め向つたという高野本莊とはどこであるか。一般的には筑後國（福岡県）浮葉郡竹野莊（現在田主丸町竹野）といわれているが、八坂本平家には「豊後と筑後の境なる高野の本莊」と記され、筑後川南岸の竹野莊では、地域的に符合しない。そこで「豊後と筑後の境」ということばに重点をおいて、高野の地を求めると、文字どおり豊後と筑後の境界に近く、豊後國日田郡大肥莊高野村がある。この大肥莊は安樂寺

別当御房を領家とする莊園で、筑後川の支流大肥川の流域一帯である。安樂寺とは安樂寺天満宮のこと、大宰府天満宮の別称、安樂寺別当は天満宮の御師（官司）で、当時の安樂寺別当は安能という人物、大宰府に平家を迎へ入れた無二の平家方であつた。

こうした条件を考えると、大肥莊高野村あたりが、惟栄の大宰府進攻拠点となつたとみては不思議ではない。

渡辺澄夫氏の「大分県の歴史」には、緒方惟栄の大宰府攻めについて「豊後國日田郡司職次第」を引き、臼杵惟隆は北道を進んで宇佐宮に入り板井種遠と戦い、中道を進んだ日田永秀が筑前の三笠原に攻め入つて平家を追ひ落としたと記述している。

これは渡辺氏もいうように、日田氏が自己の勲功を誇張した記録になつており、惟栄兄弟の活動は二の次になつてゐる。しかし、惟栄の大宰府進攻作戦を考えると、豊前における平家方の主力板井種遠や、宇佐大官司公通に對しては、臼杵惟隆が向つてこれを襲撃し、日田永秀にはその領に近い大肥莊を攻めさせて、大宰府攻めの拠点にし、惟栄自ら大肥莊に入つて菊池隆直の行動を封じ、筑後地に越して高野に向つた平家軍の側面を攻撃したものであろう。

平家は緒方惟義が、三万余騎の勢にて、既に寄すと聞えし分は、取る物も取りあへず、大宰府をこそ落ち給へ。さしも頼もしかりつる天満天神の注連のおたりを、心細くも立別れ、駕輿丁も無ければ、薔花鳳箏は唯名をのみ聞きて、主上腰輿に召されけり。因母を始め参らせて、やんごとなき女房達は、袴の裾を高く取り、大臣殿以下の卿相雲霞は、指鬘の側を高く袂及び、歩躑で水城の戸を出でて、おれ先にわれ先にと、箱崎の津へこそ落ち給へ。折節降る雨車軸の如し、吹く風

砂を揚ぐとかや。落る涙路も雨、分きて何れも見えざりけり。住吉、箱崎、香椎、宗像伏し拜み、主上只旧都の還幸とのみぞ祈られける。垂水山、鶴浜など云ふ峻しき嶮難き凌がせ給ひて、渺々たる干沙へぞ赴かれける。

（平家物語卷八・大宰府落）

緒方惟栄の軍兵寄すとの報に、大宰府を落ちた平家氏、安徳幼帝を奉じて、大宰府大路（現在の国道三号線におたる）を北上し、住吉社を伏し拜みつつ、御笠川（現在の石堂川）沿いに箱崎の津に着いた。箱崎から香椎の浜伝いに陸路を辿り、粕屋郡から宗像郡へ、そして宗像、遠賀兩郡境の垂水岬（垂水山）を越えて内浦（鶴浜）にいたり、芦屋津に出迎えた山鹿兵藤次香遠に守られて山城に入った。この道は古の府道で、山陽道（中国路）を経て豊前社崎（門司）に上り、到津（小倉）、嶋門（若松・戸畑）、津日（宗像郡）と海岸線に沿うて走る官道である。

平家一門の人々は糟屋郡境で警護の原田種直と別れ、宗像大官司の庇護を得て、垂見岬を越え遠賀郡に入った。道中、箱崎・香椎・宗像の神々にお使と遣って、前途の無事を祈ったが、平家にとっては、原田種直と山鹿氏の兵藤次香遠が仲違いしていることが残念であった。

平家が山城城にいたのは数日であつたらしい。このとき山鹿香遠の援助で、豊前柳ヶ浦（北九州府門司世大里府道）にわたる、ここに内裏（行在所）をへらくろうとしたが、豊後の緒方惟栄らが押し寄せてくるという噂があり、また長門方面の源氏が攻めよせるとの情報もあつて、とうてい内裏造営などはできないので、京都郡（豊前）城井の板井種遠をたよって南下、種遠の縁家でもあり、平家とは因縁浅からぬ宇佐大官司のもとに落ちて行った。もし

て大官司公通父子が板井種遠の庇護をうけて、泉原川河口の柳ヶ浦に行在所をつくり、九月から十月（壽永二年）にかけて、この地にあつたが、十月末、宇佐を出て讃岐屋島に移った。この柳ヶ浦には一門の前途をはかさんで入水した平清経（重盛の三男）の墓がある。

（注）柳ヶ浦 北九州市門司地区大里（内裏の意とす）柳町。

柳ヶ浦 宇佐市柳ヶ浦（泉原川口）行在所内宮園におつたところ。

平家が宇佐の柳ヶ浦を發して、讃岐の屋島に内裏をつくり、これに拠つたのは壽永二年十月末、この月平家方は備中水島で、木曾義仲を破り、敗走させている。源範頼・義経が入京して義仲と戦い、これを粟津に敗死させたのは壽永三年一月、ついで源頼朝に対し、平家追討の命令が下つてゐる。こうした情勢の中平家は福原に進出。二月、一の谷合戦が行なわれ、平家は屋島に敗退した。

この年四月、改元されて元暦元年（一一八四）となり、平家は屋島を拠点に兵備を整えた。前年九月、平家を大宰府から追い落とす緒方惟栄は、平家から山鹿から宇佐に移つたので、豊後に帰り宇佐進攻の機を覗つていた。

一方、平家の東帰に随従した九州の武士は、菊池隆直・原田種直・松浦高俊・山鹿香遠・板井種遠などで、いずれも一の谷合戦に参加したが、平家が敗退すると、それぞれ郷國に引上げた。この中に緒方一族の佐加（友）三郎維良也、佐伯三郎惟康がいたことは注目しなければならぬ。

緒方惟栄が宇佐宮を焼打ちし、神室を奪取したのは元暦元年七月六日、一の谷合戦から五か月後である。この間の緒方一族の動きははつきりしないが、惟栄の行動も佐伯惟康についての伝承から推察すると、源氏方として動いていたものであらう。

（おわり）